

まもなく、東日本大震災から十五年目の春を迎えようとしています。数年前の三月十一日、「震災から〇年」という記事を目にしたAさんは、「防災のために、今、何ができるのか」を夫婦で話し合いました。そして、小学生の長男とも相談し、一家で行政の防災施設に行ってみることにしたので、施設の隣には消防署があり、数人の消防士が消防車両の点検をしていました。その様子を見ながら、Aさん一家は施設へと入りました。場内マップを見ると、フロアごとに様々なメニューが用意されていました。災害の記録や対応を学べる映像鑑賞コーナー、消火器を使った実地訓練ができる体験コーナー、特殊な機械を使って震度7の揺れを体感できるコーナーまであります。激しい揺れや、建物・電柱が前後左右に倒壊していく恐怖。煙の立ちこめる中を、ハンカチを口に当てるだけの最低限の防災具で避難しなければならぬ状況。Aさん一家は、災害の一端を肌で感じました。

震災でどのようなことが起こったのか。そして、「自分たちが被災したら」「身近で災害が発生したら」どう行動すべきか、一家は帰路の途中、そんなことを考えました。自宅に戻ると、Aさん一家は防災用リュックの中身や、水・非常食の保管状況を確認することにしました。すると、水や非常食はいずれも賞味期限が過ぎていました。東日本大震災後の二、三年は定期的に点検していたものの、その後は確認を怠っていたのです。



自然を畏敬・親愛し 「災害への備え」を心がける

またAさんは、長男の通学路を「地震が起きたら？」と想定しながら、家族三人で歩いてみることにしました。歩きながら、地震の際に倒壊しそうなものを見つけると、「ここは危ないね」と指をさして確認していきます。通学路から一本入った細い路地にはブロック塀が多く、倒れると逃げ場がなくなることもわかりました。

さらに一家で話し合い決めたのは、避難場所についてです。長男の通う小学校が地域の避難場所に指定されていることから、家族がバラバラの時に災害が起きた場合は小学校の体育館で落ち合うことにしました。その後もAさん一家は、折を見て地域の防災訓練にも参加するようになりました。

災害は、自然（地球）と共に暮らす私たちの隣り合わせにあります。倫理研究所の第二代理事長・丸山竹秋は次のように述べています。

訓練や演習は実際とは異なることも多いが、そのとおりにならないこともあるからと、訓練や演習をしなかったら、結果はより悪くなるだろう。（中略）

倫理（みち）とはその精神を整理し秩序づける法則だが、過去の経験（歴史）を教訓とし、それらを活用して現在そして未来に備える心構えを実行することである。

（『地球倫理の時代』）

自然を畏敬し親しみ、「地球人」である自覚を深めつつ、いざという時に自分と大切なものを守るよう備えながら、地球と共に暮らしたいものです。